

翔

2012 August No.217
百万石蝶談会



白山市荒谷でエルタテハを採集

旧尾口村荒谷林道の標高1000m付近を走行中に、車の接近で飛び立つ蝶が見え、1時間後に再び同じ場所を通ると、また飛び立つのが見えた。車から降りて待っていると、砂利の路面に止まったので採集すると、エルタテハだった。

石川県内のエルタテハの観察例は少なく、そのほとんどは白山周辺の深山幽谷で観察されている。今回の採集地は、これまでに観察された白山山塊の中でも、最も外れた位置にある。



2011年8月7日 石川県白山市荒谷 (標高1000m) エルタテハ 1頭 松井正人

《 参考文献 》

松井正人 (1993) 石川県のタテハチョウ5. 翔(101):3-6.

松井正人 (2011) 白山「馬のたてがみ」でエルタテハを目撃. 翔(211):1-2.

吉村久貴 (2005) 石川県産蝶類14種の記録. とっくりばち(73):18-19.

《まつい まさと 〒920-3121 金沢市大場町東871-15》

表紙のむし -ベニヒカゲ-

娘は小さい頃からチョウが好きで、チョウを見るために、山にもけっこう登りました。ベニヒカゲは、高山チョウと言われるグループの中でも、最も目にする事が多く、これまで、白山はもちろん、立山、八方尾根、上高地、乗鞍岳、双六岳、早池峰山など、多くの場所で見かけました。娘にとっては、高山チョウの入門編のような種類です。その娘も、もう高校生、いつまでいっしょに見に行くのかなあ……。 平松新一

石川県産ハウチワウンカはカリヤスに寄生

江口元章

ハウチワウンカは、低地の湿地周辺のチガヤに生息するとされているが（環境省編改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—(2006)）、石川県志賀町においては生息環境および寄生植物が異なるらしいことを以前報告した（江口、2007）。すなわち、生息環境は陵地帯の尾根筋に広がるアカマツ・コナラ林に点在する、赤土のむき出しになった裸地にイネ科草本がみられるような環境であり、そこにはチガヤは見られず、寄生植物は特定できなかつた。2008年8月20日に再度志賀町五里峠を訪れ、ハウチワウンカを探した結果、イネ科のカリヤスに止まっていることを確認した。個体数は少なく、2個体が確認された。

また、新たな産地として2010年に金沢市別所でも生息が確認された。

2010年9月14日 石川県金沢市別所 (N36° 30' 18" E136° 40' 22") 2♂1♀目撃 江口元章

ここの生息環境は五里峠とよく似ていて、アカマツ・コナラ林からなる丘陵地の山腹にある、赤土が裸出する部分のあるイネ科草本群落であった。ここでも五里峠と同じく、カリヤスが寄主となっていた。

《参考文献》

江口元章(2008)石川県で確認されたハウチワウンカ. 翔(190): 7.

《えぐち もとあき 〒480-0103 愛知県丹羽郡扶桑町柏森西屋敷201》

ムラサキツバメのいなかった記録2011

松井正人

■2011年10月8日 石川県金沢市八田競馬場の緑地

2006年には、緑地のマテバシイでムラサキツバメが発生していたが、2011年は食痕を観察できなかつた。2006年は、樹木の剪定も行き届き、落ち葉ひとつ無いほど完璧に管理されており、いつでもマテバシイの柔らかい新葉があつたが、年々管理が緩くなっているようで、剪定もあまりされていないようだった。

■2011年10月8日 石川県羽咋市千里浜の街路樹

能登海浜道路千里浜インターを降り、兵庫町方面へ向かう道の300m程に、かなりの数のマテバシイが有り、2005年と2009年にはムラサキツバメが発生していたが、2011年は食痕を観察できなかつた。

《まつい まさと 〒920-3121 金沢市大場町東871-15》

2011年アサギマダラ日記

松井正人

■ 5月14日 遷移が進む海岸

珠洲市でアサギマダラの説明会があり、飛来にはまだ早いですが、珠洲の三大飛来海岸を調査する。寺家、狼煙、川浦では、スナビキソウは咲いていたが、いずれの場所も背の高いハマニンニクが穂を伸ばし覆われつつあった。



勢い良く穂を伸ばすハマニンニク(川浦海岸)

■ 6月5日 アサギマダラと競争

輪島市三ッ子浜を皮切りに、マーキングしながら狼煙へ向かい、狼煙に着いてマーキングしていると、途中でマーキングしてきた三ッ子浜や赤神のアサギマダラが相次いで到着した。



ハマニンニクに埋没するスナビキソウ(狼煙海岸)

■ 6月11日 狼煙はマーク個体ばかりなり

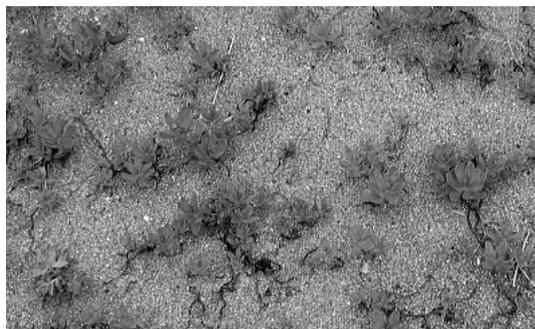
珠洲はアサギの飛来が多いことで知られ、熱烈なアサギファンの存在でも知られている。4大ポイントの寺家、狼煙、川浦、高屋で捕獲すると大概是マーク済で、狼煙でマーキングしようとする、採るもの全てマーキング済だった。



何も生えていない海岸には、まずスナビキソウが生え、その後いろんな草が生えてくる(狼煙海岸)

■ 6月12日 不死身のスナビキソウ

海岸マーキングにスナビキソウは欠かせないが、スナビキソウが繁茂して砂が落ち着くとハマヒルガオやハマエンドウ、ハマニンニク等も成長しだし、そうなる、と数年で置き換わってしまう。ところが、大波でごっそり砂が削られると、深部に埋まっていたスナビキソウの根がむき出しになり、復活が始まる。



むき出しになった根から復活したスナビキソウ

■ 6月13日 アサギがつなぐ世界農業遺産
能登半島と佐渡が6月11日に国連食糧農業機関が認定する「世界農業遺産」に登録されたが、この両地を繋ぐかのように、6月8日に能登半島の珠洲市川浦を飛び立ったアサギマダラが、13日に佐渡市藻浦で見つかった。

■ 7月8日 江差町でアサギ調査

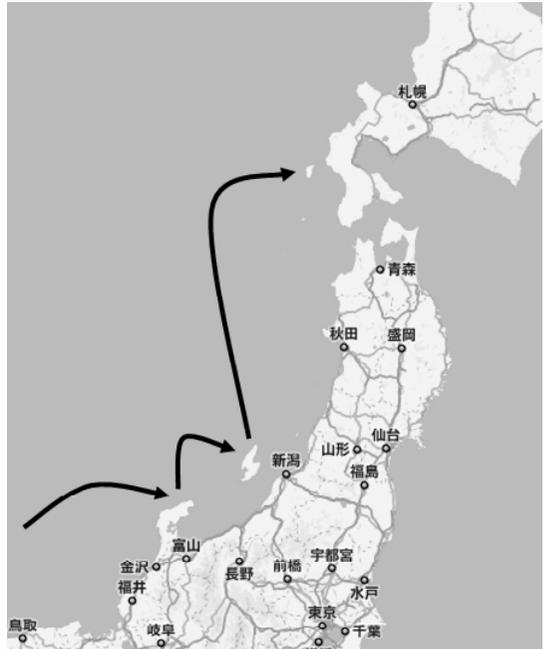
佐渡でのラッキーな再捕獲に気を良くして、ホップ・ステップ・ジャンプ計画を発動してしまった。最後のジャンプ先は北海道で、スナビキソウにアサギが飛来していないかと、函館の対馬さんに頼み込んだ。快諾してくれたものの、調査の結果、アサギは全く見つからなかった。対馬さん、ありがとうございました。

■ 8月9日 白山ビューポイント

天気は最高、7時に室堂を出発し8時から何時間も観光新道の「馬のたてがみ」にいる。一面のお花畑と360度の絶景が広がる白山きってのビューポイントで、この絶景の中を羽ばたかず悠然とアサギマダラが通り過ぎて行く。景色に溶け込んでいるアサギマダラにマーキングしようなんて気は起こらない。ここは、時間を忘れる竜宮城のような場所である。

■ 9月11日 白山市白峰西山でマーキング

アカエゾゼミの遅鳴きを聞きに行くと、林道横の小さなヨツバヒヨドリに3頭のアサギマダラが止まっていた。セミの声も録音できて帰ろうとすると、まだ止まっていたので2頭にマーキングした。10日



日本海を北上するアサギマダラを能登、佐渡、奥尻島で再捕獲するホップ・ステップ・ジャンプ計画。



アサギマダラが頭上を悠然と通り過ぎる夢の空間「馬のたてがみ」



アカエゾゼミが鳴くブナの森の木陰にアサギマダラが止まっていた

程すると、このうちの1頭が13km離れた白山市荒谷で再捕獲されたと連絡が入った。張り切って数多くマーキングしても再捕獲されるのは難しいのに、こんな事も有る。

■ 9月18日 町を挙げてのマーキング

宝達志水町が実施するマーキング会が初めて開かれ、天気も気温も最高のコンディションとなった。9時頃から人が集まり始め、龍宮城での説明会も大忙し。一段落したところで頂上に上がると、人が多い割にはアサギが少ない。それでも、午前中でほとんどの人がマーキングを終えて下山した。今日一日で180頭ほどにマーキングできた。

■ 9月25日 不思議な一日

宝達山でのマーキングも終盤戦。18日を過ぎると気温が上がらず、アサギの飛来は少なくなった。今日の気温も低いが、とりあえずは宝達山に向かう。ところが、気温が低いにもかかわらず、次から次へとアサギが湧くように飛んでくる。マーキング数は、今シーズンで一番多い254頭となり、再捕獲3頭のおまけも付いた。

■ 12月31日 再観察ラッシュ

今年の宝達マークの再捕獲数は21頭と多い。秋のマーキング数が1554頭だったので、74頭に1頭の高率に喜んでいた。ところが白山マークは、56頭が再捕獲されており、40頭に1頭と途方もない数字になっていた。



宝達志水町実施のマーキング会は、お天気に恵まれ、大勢の人達で賑わった。(9月18日)



「アサギだ！」の声にダッシュする沼田兄妹。見事ゲットしたのは、長野県の「のっぺ山荘」から飛来したものだ。(9月25日)



岐阜県柳蘭峠から飛来アサギマダラとマーキングに励む堀夫妻。(9月25日)

アンボン・バリ撮影紀行（上）

松田俊郎

与那国ホンダの西條さんからの誘いで、今回は、アンボンとバリへ蝶を主とした撮影旅行に行くことになった。バリは観光の島として有名であるが、アンボンは知らない人の方が多いのではないだろうか。アンボン島はインドネシアの西に位置する、マルク諸島に属する島で、その中心都市アンボンは、昔から貿易で栄えたところである。すぐ近くには、ゴライアストリバネアゲハで知られるセラム島があり、西にはブルキシタアゲハで知られるブル島、東にはアカメガネトリバネアゲハで有名なバチャン島、ハルマヘラ島がある。また、アンボンは、生物地理区ではオーストラリア区に属し、蝶相はニューギニアに最も近いそうだ。出発は1月末で1週間位の予定と聞いて、北陸では真冬の時期なので躊躇したが、ミドリメガネトリバネアゲハやオオルリアゲハも期待できると聞いては、やはり行くしかない。同行者は、西條さんの他、横浜の山本さん、京都の森さん、ガイドとして、バリのインドラ君、スラウェシのルディー君と、昨年とほぼ同様のメンバーとなった。



■ 2012年1月31日（火） バリへ

前夜は、関西空港日航ホテルに宿泊した。関西空港、午前11時発ガルーダ航空0883便に西條さん、森さんと一緒に搭乗する。ジェット機は、順調に飛行し、バリのデンパサール、グラライ国際空港には現地時刻で午後5時過ぎに到着した。気温は31度、真冬の日本から真夏の所に来てしまった。時差は1時間なので、時刻は、日本よりも1時間早くなっている。関西空港からここまで約7時間のフライトだった。

今日の宿は、クアタウンにあるBOUNTY HOTELだ。プールが2つもあって、なかなか立派なホテルだったが、部屋が奥まったところであり、よく似た箇所が何か所もあって迷路のようになっており、一度、外に出て動き回ると自分の部屋に戻るのが一苦労なのが難点だった。宿泊客は、オーストラリア人が多いようであった。

■ 2月1日（水） アンボンへ

今日は、アンボンへの移動日。アンボンへ行くには、スラウェシのマカッサル（ウジュン・パندان）まで飛び、ここでアンボン行きの飛行機に乗り替えることになる。デンパ

サールのグラライ国際空港発が午前6時50分の便ということなので、早朝5時にホテルのロビーに集合し、デンパサールへと車を走らせた。ガルーダ航空620便に搭乗し、1時間余りのフライトでマカッサルの空港に到着。アンボン行きは12時過ぎなので、待ち時間が長すぎるなあ等と思っていたら、ここで問題が起きた。ルディー君によると、これから行こうとしているアンボンでの蝶のいる場所は、バリ在住のミッキー氏のテリトリーだそうで、ガイド料として一日200万ルピア(日本円で約2万円)をミッキー氏に払わなければならない。これを無視すると、トラブルになりかねないので責任を持ってないと言う。一日200万ルピアという、滞在予定の三日では600万ルピアになる。西條さんは、「高すぎる。アンボンはやめてどこか他に行こう。」なんて言っていたが、ここまで来て、アンボンをあきらめるというわけにはいかないだろう。4人で話し合ったが、名案は浮かばない。何とかもっと安くならないかということで、ルディー君にミッキー氏と交渉してもらうことになり、結局、三日で200万ルピアということになった。4人で割れば、一人50万ルピア(日本円で約5000円)だ。

アンボンの空港には、現地時間14時50分頃に着陸。1時間40分位のフライトだった。何か不思議な気がするが、アンボンでは、バリより1時間進んで日本との時差はなくなり、日本と同じ時刻になる。泊まるホテルは、アンボンの街中にあるそうだ。アンボンの街は、海を挟んで対岸にあり、近そうに見えるのだが、車で行くとすると、海を一回りして行かなければならないので、1時間以上もかかった。ホテル名は、THE ORCHID HOTEL。ORCHIDは蘭を意味するそうで、そういえば、入口に蘭の花が飾ってあった。

■ 2月2日(木) ミッキー氏の蝶園へ

朝7時50分にホテルを出発。今日は、Plain Villageというところに行くそうで、そこに、ミッキー氏の蝶園があるとのことだ。アンボン市内は、通勤時のためか車やバイクの行列ができています。しばらく行くと混雑を抜け、左手にきれいな海が見え隠れする。道路の横に人だかりができていますので、車の窓越しに見ると青空市のような。色とりどりの熱帯の果実がいっぱい並んでいる。

昨日来た道を逆もどりして、空港を過ぎたところで、バイクに乗った青年が二人、手を振っている。彼らが、ミッキー氏が手配したガイドのようだ。(後で、ミッキー氏の子どもであることが分かった。)車は右



いよいよ出発だ！

手に折れ、川沿いに上流へと進んで行く。道はだんだん細くなって、でこぼこ道になり、車ではもう進めなくなったところで、停車。時刻は9時40分だった。ここから、河原の道を歩いてさらに上流をめざす。道は林へと続いていて、林の中に入った。でかいクモが巣を張っている。そのすぐ隣にはミノムシがいたが、これもでかい。長さ10センチメートルはありそうだ。先に進んで行くと、きれいなハナダカトンボがいた。黒と空色のツートンカラーのトンボで、翅の部分の色合いは異なるが、多分、スラウェシのバンティムルンで見たものと同じ種類だろう。(カラー写真A)

林を抜けると、また河原だ。河原の道を歩いて行くと、谷川を渡らなければ先に進めない所に何度も出くわした。最初のうちは、なるべく靴の中に水が入って来ないように気をつけ、水面から出ている石の上を飛び移るようにしていたが、転んでカメラを水浸しにしてしまったのは取り返しのつかないことになってしまうことに気づき、後は靴のまま、中に水が入ってくるのには構わず、ジャブジャブと谷川を渡った。この谷川の水だが、全然冷たくない。生ぬるいと言った方が当たっているだろう。変なところで、熱帯に来ていることを実感した。

エメラルドグリーンを目をした小型のトンボは初めて見るトンボだが、サナエトンボの仲間だろうか。坂道で、上の方から下りて来た、30代と思われる女性とすれ違った。この女性は、大きな荷袋を頭に乘せ、果物の入った袋を背負っていた。村へ売りに行くのだろうか。驚いたのは、この女性が裸足であったことだ。こんな道を裸足で歩いて、大丈夫なのであろうか。



砂利道に行く現地の女性

ミッキー氏の蝶園に着いたのは、11時過ぎだった。40代と思われる女性二人が我々を出迎えてくれた。インドラ君が、この二人と親しそうに話しているところをみると、どうも旧知の仲らしい。一人は、ミッキー氏の奥さんで、もう一人は手伝いの女性ということであったが、二人で、この蝶園の世話をしているようだ。ケージでは囲わず、食草となるウマノスズクサを植え、ほぼ自然に近い状態でメガネトリバネアゲハやキシタアゲハの類を飼育している。この蝶園には、何本かのコンロンカの木があった。コンロンカの木は、数十メートルにもなるそうだが、ここにある木は、どれも6~7メートルだった。白いがく片が目立ち、筒状の黄色い花をつけている。この木の下でしばらく待っていると、ミドリメガネトリバネアゲハ(*Ornithoptera priamus*)のオスが吸蜜にやって来た。(カラー写真B)やはり、でかいというのが第一印象だった。林の中を悠然と飛び、コンロンカの花のどこ

ろでホバリングしながら吸蜜する。ゆっくり飛ぶので、何かスローモーションビデオを見ているような錯覚を覚えた。しかし、下から見上げながら撮るしかないので、満足できるような写真は撮れなかった。

振り返ると、サビモンキシタアゲハ(*Troides hypolitus*)が目の前を飛んでいる。後翅の灰色と黄色の模様が目立つ。この蝶もゆっくりと飛び、時々、草に止まりそうになるのだが、止まらない。どうも、雌のようで産卵したかのように見えた。この2種が、吸蜜に来る姿を何度か目撃したが、ここでは、ミドリメガネトリバネアゲハよりサビモンキシタアゲハの方が多くであった。ウマノスズクサが植えてあるところへ行ってみると、

つるになったところに7~8センチメートルはありそうな、でかい幼虫がついている。ほぼ全身黒色だが、体の中ほどに白い帯のような模様がある。また棘のような肉質突起が発達していて、一見、グロテスクな幼虫であった。付近を探してみると、葉っぱの表裏やつるになったところ等で簡単にいくつもの幼虫が見つかった。そして肉質突起の色、形状や白帯の違いから、少なくとも二種類の幼虫がついていることが分かった。《後日、調べてみたところ、肉状突起の先が尖っている方はトリバネアゲハ類の幼虫(多分、ミドリメガネトリバネアゲハ)で、尖っていない方はキシタアゲハ類の幼虫(多分、パプアキシタアゲハかサビモンキシタアゲハ)であることが分かった。(カラー写真C)》



トリバネアゲハ類の幼虫



吸水するシロモンルリシジミ

枯れ木に、見たことのない蝶が止まっている。かすかに開いた羽の表面はルリシジミのようだが、裏面は変わった模様だ。この蝶は、シロモンルリシジミ(*Danis danis*)だった。

蝶園の中に建てられた小屋で、昼食休憩。ガイドの青年の一人が、15メートルはありそうな木に、するすると上っていく。何をするのかと思って見ていると、その木のとっぺん近くについているココナッツの実をナタのようなもので切り落とした。これを昼食の後の

デザートにするというわけだ。すると、突然、雨が降り出した。青年は慌てて木から下り始めた。さっきは晴れていたのに、どしゃ降りの雨だ。こんな時、小屋に避難できるのはありがたい。そして、15分ほどすると雨は止み、また青空が戻って来た。今は雨季だそうだが、いわゆるスコールだ。この後も何度もスコールにあったが、雨の降るのは短時間で、何時間も降り続くということはない。

雨あがりの下草にとまっていたのは、チャイロタテハ(*Vindura erota*)だった。先ほどのコンロンカの木の下に戻って、しばらく待っていると、オオルリアゲハ(*Papilio ulysses*)が飛んで来た。まばゆいばかりの青は目に焼きついたが、吸蜜時間は短く、写真は撮れなかった。そして3時過ぎに、この蝶園を後にした。

■ 2月3日(金) Airsakura Villageへ

今日も飛行場の方に向かって車を走らせる。今日は、Airsakura Village というところへ行くそうで、昨日の場所より少し手前になるそうだ。空港を過ぎて右手に折れると、小さな村があった。どうも、ここがAirsakura Villageのようだ。この村に着いたのは、午前9時過ぎだった。しかし、生憎のスコールなので、雨の止むのを待つ。近くの木に原色の派手な色をしたインコが止まっているが、全然逃げる気配はない。おかしいと思っていたら、放し飼いにされているインコだったようで、村の子ども達の手にも平気で乗るので、写真を撮らせてもらった。



村の子供の手に乗るインコ

しばらくして、雨が小降りになってきたので、村から続いている道を歩き出す。近くに鳥の声が聞こえるので、声のする方を見ると、高木に袋状の巣が鈴なりにいくつもぶら下がっている。そして、何羽もの黒っぽい鳥が巣を出入りしているのがあった。日本では見られない光景だ。さらに歩いて行くと、河原に出た。その河原につけられた小道をたどって、先へと進む。途中、水辺でアカスジベッコウトンボが群れていた。



アカスジベッコウトンボのオス

アカスジベッコウトンボは熱帯地方に広く分布するようで、今年の5月にスラウェシのバンティムルンでも見ている。近年、与那国島や西表島でも記録されているトンボだ。

河原に咲いている黄色の小さなキクのような花で蜜を吸っていたのは、アリメナムラサキ (*Hypolimnas alimena*) のオスであった。裏面はリュウキュウムラサキ (*Hypolimnas bolina*) のオスに似ているが、表面前後翅の青い帯で見分けられる。この河原では、リュウキュウムラサキのオスも見られた。(カラー写真D)

10時40分頃、目的地に到着。河原から、右手の斜面に入った林だ。ここには、細い道がついていて、小屋とコンロンカの木があり、コンロンカの木には、やはり筒状の黄色い花が咲いていた。木の高さは、6メートル位であろうか。ここは、斜面になっているので少し上った方が写真を撮りやすいのではないかと思い、木の生えている場所からやや上の方に移動した。コンロンカの花を見ると、ちょっと遠いが、目線とほぼ水平の位置にあり、これなら何とか撮れそうだ。

そこでしばらく待っていると、パプアキシタアゲハ (*Troides oblongomaculatus*) が、やって来た。(カラー写真E) 後翅の黄色が鮮やかだ。コンロンカの花で吸蜜した後、

羽ばたきと滑空とを繰り返して、辺りを旋回しながら飛び去った。サビモンキシタアゲハも時々、吸蜜にやって来た。サビモンキシタアゲハの方が、パプアキシタアゲハより一回り大きく、体が重いせいか、飛び方もゆったりとしているように感じた。ここでは、この二種を何度か見たが、ミドリメガネトリバネアゲハは見られなかった。



コンロンカに来たサビモンキシタアゲハ

斜面を下りると、草の生えた湿地に小さなトンボがいるのを見つけた。これは、日本最小のトンボとして有名なハッチョウトンボじゃないか。辺りを見ると、いくつもいるが、オスばかりのようだ。(カラー写真F) しかし、広い太平洋を隔てた異国のこんな地にハッチョウトンボがいるなんて不思議だなあと思った。(後日、調べてみたところでは、ハッチョウトンボは、国外では朝鮮半島・中国から東南アジア・オーストラリアにいたる熱帯・亜熱帯地域に分布するそうで、案外、広範囲に分布するトンボであることが分かった。オーストラリアにまで分布するなら、アンボンにいることもうなずける。しかし、アンボンで見たハッチョウトンボ?は、日本産のハッチョウトンボとは明らかに胸部の体色に違いがあり、別種である可能性も捨てきれない。)



A スキバハナダカトンボ



B ミドリメガネトリバネアゲハのオス



C キシタアゲハ類の幼虫



D リュウキュウムラサキのオス



E パプアキシタアゲハの吸蜜



F ハッチョウトンボのオス



G チョウトンボの一種



H 飛翔するオオルリアゲハ

12時半頃、河原で、みんなそろって弁当を食べる。しかし、揚げ物が多く、おまけに香辛料の効いた辛いものが多い。もっとあっさりしたもの、できればうめぼしか、つけものを食べたいなあ等と思うが、ここはインドネシアのアンボン、それは無理というものだ。デザートにドリアンがあった。森さんがドリアンを食べたいと言っていたので、買ってきたのかも知れない。しばらく休憩した後、村の方に戻ることになった。

河原の道を歩いていても、あまり蝶はいないので、途中で横にそれて林の方に行ってみた。そして、林の中を歩いていると、小さな池を見つけた。何かいないかなあと思いながら池の周りを見ると、枯れ木の枝に止まっていたのは、青色の翅をしたチョウトンボだった。(カラー写真G) もちろん、こんなきれいなチョウトンボを見るのは、初めてだ。翅は青色に見えたが、よく見ると青色に緑色を混ぜたような微妙な色合いだ。証拠写真は撮ったので、もっと近くに寄って撮ろうと思って体を動かした瞬間、そのトンボはふいに飛び立ち、林の上空へと消えてしまった。残念無念！他にも、あのトンボがいないかと、辺りを探してみたが、世の中、そんなに甘くない。二度とあのトンボを見つけることはできなかった。

村に戻ったのは、午後1時40分頃だった。村の子ども達が広場のようなところで遊んでいる。そんな子ども達を横目に村の近くの林に入ると、林の中をすごいスピードで駆けるように飛ぶ蝶がいる。コモンタイムイに似ているが、後翅が黒い。この蝶はヨシノタイムイ (*Graphium macfarlanei*) だった。林の中の枯れ葉に止まっていたのは、アリメナムラサキのメスだった。この林を抜けると、細い道があった。と、オオルリアゲハがこちらに向かって飛んで来るではないか。(カラー写真H) そして、辺りをヒラヒラと飛び回りながら林の中に消えて行った。このオオルリアゲハは、この道の水たまりで、吸水していたようだ。

午後2時半頃、この村を離れる。帰り道、この島で一番大きいというホテルに立ち寄り、ホテルのラウンジで冷たいものを飲んで疲れを癒す。このラウンジからは、コバルトブルーの海を見渡すことができ、眺めは最高であった。また、ラウンジに続く庭には、初めて見る真っ赤な南国の花が咲いていて、その花に、青い鳥が蜜を吸いに来ていた。この鳥も初めて見る鳥であった。



南国の赤い花と青い鳥

会員の動き・しゃばの動き

■ピュルルの宿

毎年、同じ時期に訪れる宿がある。アサギマダラの飛来が始まる5月下旬、ピュルルル～、ピュルルル～、の声で目覚める。遠くで近くで、朝だよ～、朝だよ～と鳴いている。宿を出るのは5時、早朝にもかかわらず、おにぎり笑顔の見送りに、活力がみなぎってくる。

■輪島市三ツ子浜でマーキング会

5月26日、27日と三ツ子浜でアサギマーキング会が開かれた。早朝6時からにもかかわらず、両日とも南志見小学校のほとんどの児童が集まったが、残念な事にマーキングどころか観察もできなかった。ほとんどの海岸でスナビキソウが満開なのに、アサギの飛来が少ない。

■馬の背の主がいらない

これまで長らく馬の背の主として君臨していたS氏の姿が見えない。フジの舞う頃から毎日医王山馬の背に陣取り、行けば必ず会えたS氏の姿が見えない。馬の背サロンを開催し、馬の背虫屋図鑑を著したS氏の姿が見えない。体調を心配したが、ニコニコ顔で初孫を抱いていた。

■能登半島は巨大なトラップ

初夏に北上移動するアサギマダラの県内での観察は、珠洲市がダントツ一番。日本海に突き出した能登半島、加賀市から輪島市にかけての西側の海岸約140kmは、トラップの入口。たどり着いたアサギが能登半島を北上することで、最終地点となる半島突端の珠洲市に集まると想像している。

■中宮展示館裏でギフチョウ観察

リニューアルオープンしたばかりの白山自然保護センター中宮展示館の自然観察路で、6月14日にギフチョウが撮られ、同HPに掲載されている。周辺にはブナオ山観察舎と山毛櫛尾山に、それぞれ1件の目撃記録が有る。この時期にしてはきれいな♀で、交尾囊まで付いていることから、未確認の生息地が有るのかもしれない。

■今日出会うかも知れない

長崎県1頭、大分県2頭、山口県1頭、淡路島1頭と、今年は珠洲で再捕獲が相次いでいる。足が痛かろうが、眠たかろうが、万難を排して調査に行きたい。再捕獲には、それほどの魅力がある。

■ヒメボタル観察会

6月28日、能登の大福寺でヒメボタル観察会が行われ、午後10時を過ぎる頃から下枝の無いスギ林内で多数が観察された。旧富来町の大福寺は、昨年になって能登地区で初めて見つかったヒメボタルの生息地。

■7年ぶりにリニューアルオープン

2006年から休業していた新岩間温泉の山崎旅館が7月2日に再開した。かつては小桜帰りに愛用していたが、体力が失せた昨今は単純に温泉に入りたい。1泊2食9千円からで、お風呂だけは700円。

■日焼けはフィールド活動の証

毎日が日曜の竹谷氏、フィールド活動に精を出し、早くもこんがり焼けている。何に夢中になっているのかと思ったら、近所の発掘調査に駆り出されているとか。

■訂正

本誌216号の「ヒメボタルを石川県志賀町富来地区で確認」の訂正。p. 2の7行目
 (誤) カタアカミナミボタル
 (正) カタモンミナミボタル

■ 例会の記録 ■

6月14日(木) 浅地メッキ2階にて、午後8時から開催。

アサギマダラの飛来が真っ最中で、県内マーク数は約570頭、珠洲では姫島の再捕獲が2頭あった。目玉のでかいヒメボタルが能登で観察できるが、発光は午後10時から観察期間はわずか1週間。と、県内の近況について松井氏から報告があった。

その他の話題は、そろそろ蛹化のジャコウアゲハ、クリの花に飛来するオオミスジ、ウラゴマはなぜ減ったのか、「日本のチョウ」の著者割引、福島のとウホクトラ、高島用水でゲンジボタル、などなど。

参加は、浅野、吉村、浅地、井村、松井の5人。

■ 例会の記録 ■

7月5日(木) 浅地メッキ2階にて、午後8時から開催。

今回は、浅地氏が自慢のマイクロスコopを披露。医王山のフトキクスイをマイクロスコopを使って拡大映像をテレビ画面に写し出し、老眼ばかりの参加者をうならせた。更に、拡大するとピントの合う範囲が狭くなるため、ピントの合う場所をずらした何枚かの写真を使って総てにピントが合った写真を作り出す深度合成の技を紹介。

その他の話題は、珠洲で再捕獲された5頭のアサギ、中宮展示館で撮影されたギフ、ウラギンスジヒョウモンは少ないのか、医王山柵首でウラゴマダラ、高遠でオオミスジ多数を目撃、テツイロヒメは都市昆虫、観察数が戻ったイカリモン、「日本のトンボ」の著者割引、などなど。

参加は、浅野、吉村、福富、山岸、大宮、松井、細沼、浅地、井村、勝海の10人。

■ ■ 表紙デザイン：小幡英典 ■ ■

目 次

松井正人：白山市荒谷でエルタテハを採集	1
江口元章：石川県産ハウチワウンカはカリヤスに寄生	2
松井正人：ムラサキツバメのいなかった記録2011	2
松井正人：2011年アサギマダラ日記	3
松田俊郎：アンボン・バリ撮影紀行(上)	6
編集部：会員の動き・しゃばの動き	14

翔 217号

Tobu 2012年8月10日発行
 百万石蝶談会
 金沢市大場町東871-15 松井方

<http://homepage3.nifty.com/100man/>
 ☎920-3121 ☎076-258-2727
 郵便振替 00750-8-562
 印刷 小西紙店印刷所

